

タイトル	まえがき(<特集>共同研究報告：欧米諸国における多文化の問題と日本の課題)
著者	常見，信代
引用	北海学園大学人文論集，18：1-4
発行日	2001-03-31

欧米諸国における多文化の問題と日本の課題

まえがき

平成12年8月に英米文化学科の教員が中心になって研究会を発足させ、「欧米諸国における多文化の問題と日本の課題」をテーマに共同研究に取り組んできた。本号の以下に掲載する5編の論考および次号(19号)に掲載予定の6編の論考は、いずれもその成果の一部である。

国際化・情報化の急速な展開に伴い、社会のさまざまな分野において文化の多様化が着実に進行しており、まったく異質な文化を持った個人・集団・組織が交流し接触する機会が飛躍的に増大している。異文化の理解が必要とされる所以であり、相互理解や合意の形成がますます求められているのであるが、現実には複雑化する社会の中で困難なものになっているのも事実である。

異文化の理解や異文化の交流にかかわる問題は英米文化学科にとって中心的な課題であり、これまでも幾度か検討を重ねてきた。たとえば、1993年度に北海学園学術研究助成を受けた共同研究もその一つで、「国際化＝異文化理解に関する方法論的研究——文化障壁を緩和するための効果的施策確立に関する考察」をテーマに研究を進め、その成果は『北海学園大学人文論集』第4号(1995年3月)に7編の論考となって発表されている(「研究報告特集」, 51頁～257頁参照)。

93年度の共同研究は、おもに日本国内における異文化の交流や異文化理解の実情を調査することに重点が置かれ、それを通して異文化理解の方法論を探求しようとしたものである。北海道における外国人に対する日本語教育の実情とか国内の博物館における異文化提示の変遷、あるいは在住外国人労働者の医療問題など、多面的な実態調査を通して日本における文化障壁緩和のための具体策を探ろうとした点にこの共同研究の特徴があった。これに対して、今回の共同研究は、調査研究の対象を欧米諸国に、と

りわけ英米文化学科における異文化理解教育の主対象であるアメリカ、カナダおよびイギリスに置き、これらの諸国(地域)における社会の多文化・多民族化の実情とその問題点などを明らかにしようとするものである。そのような調査研究を通してわが国における多文化・多民族共生の方策を探ろうとするものである。

社会の多文化・多民族化という現象は、地球規模で進行しており、日本に限ったことではもちろんない。EUに見られる地域統合あるいは労働力の国際移動など、現代社会はいやおうなく国境を越えたグローバル・コミュニティへの道を進んでいるといえる。そうした視点で見ると、欧米諸国は多文化・多民族化の先行例といえることができる。さらに、これらの国々では、植民地時代の同化政策に対する反省および国際的な人権尊重の動きの中で、多文化主義(Multiculturalism)政策への転換を進めて多様な民族との共生の可能性を模索しており、そこでの経験と問題点を明らかにすることは、日本の問題を考える上で必要な作業であると考えられる。

このような共通認識のもとに、今回の共同研究ではそれぞれの専門あるいは問題関心に依拠してテーマを設定し調査研究を進めるという形式を取り、統一的な結論を導き出すための集約をあえておこなわなかった。したがって、分析対象も分析方法もさまざまであり、論点も多岐にわたっているが、むしろこのような学際的研究方法を取ることによってそこに多様なあるいは複雑な現実の問題点が現れてくると考える。たとえば、宝利は同じカナダを移民大国という視点でとらえ、ますます多文化・多民族化する社会の現実を直視して二言語政策の行方を探ろうとした。また井上はひとりのフランス系カナダ人がケベックの文化を乗り越えてポップスの女王として世界的に認められていく過程に注目した。さらに、J.セルウッドは文学作品の分析を通してカナダにおける多文化主義の特徴を明らかにしようとした。このように同じカナダを対象として各人各様の切り口で分析しており、結果的に多民族・多文化社会のまさに多様な現実が浮き彫りにされているといえる。一方、岡田はアメリカを対象として先住民族の問題を文化人類学の立場で検討し、また、P.オブライエンがアメリカにおける多文

化主義の変遷とその問題点を総括しており、多文化主義をめぐるアメリカとカナダとの共通点あるいは相違点が明らかにされている。他方で、岩崎は資源・環境問題をめぐる対立を文化の問題として読み解き、地球規模で直面している今日的課題に対応するための視点を提示している。また、米坂は、英語教育のさまざまな場面で直面する異文化理解の問題を北海道での事例に基づいて紹介している。

ところで、多文化・多民族化をめぐる問題は、現代において急激に浮上してきたかのような印象を与えるが、ある意味でどの時代にもいろいろなレベルで存在していた問題でもある。そのもっとも重要な例は、アイヌ民族や在日朝鮮人・韓国人の問題など、日本の歴史そのものの中に見いだされる。このため特に日本文化学科の永井に共同研究への参加をお願いし、日本の近現代史から見た多文化の問題を検討していただいた。また、橋本は、20世紀初めにアメリカからイギリスに渡った詩人とその作品を通して文化障壁の問題を検討した。一方、桑原は古代における地中海文明と文字の伝播を分析してこの問題に迫り、常見は中世のスコットランドにおいて多様な民族が一つのネイションとして統合されていく上で新しく創られた神話と象徴とが担った役割に注目した。

異なった文化や民族の接触によって起きる現象は多様であり、かつ複雑である。それは、摩擦や衝突を引き起こす場合もあれば、多少の調整によって融合や共生に至る場合もあろう。また、現実には多文化・多民族が複合的に絡み合う複雑な状況の中では、文化の多様性を理解するだけでは不十分であり、「多様性を包含する大文化」という考え方が求められているともいえる。いずれにせよ、グローバル・コミュニティへの道を進んでいる日本社会にとって、多文化・多民族共生に向けての努力は急務である。その意味で、今回の共同研究は単なる素材の提供にすぎない。今後もこの共同研究を継続して考察を深めていくつもりである。

◇ 共同研究参加者と研究テーマ

岡田宏明（英米文化学科） 「北米北西海岸南部のクララム（Klallam）族の歩んできた道」

- 橋本 雄一 (英米文化学科) 「英国における文化障壁とエズラ・パウンド — *Hugh Selwyn Mauberley* を中心に —」
- 宝利 尚一 (英米文化学科) 「カナダ多文化主義の発展と今後の課題」
- J.セルウッド (英米文化学科) “‘Tales From the Margin’ by Frederick Philip Grove, a Forerunner of Canadian Multicultural Literature’
- P.オブライエン (英米文化学科) ‘Multiculturalism in America: Problems and Portrayals’

(以上 本号掲載)

(以下 『人文論集』第19号掲載予定)

- 永井 秀夫 (日本文化学科) 「日本における多文化の問題」
- 米坂 スザンヌ (英米文化学科) 「北海道における英語教育と多文化理解」
- 井上 真蔵 (英米文化学科) 「ボーダーを越えるケベックの歌姫」
- 岩崎 まさみ (英米文化学科) 「捕鯨問題における文化的対立の構造」
- 桑原 俊一 (英米文化学科) 「交錯することば — 地中海文明と文字の伝播 —」
- 常見 信代 (英米文化学科) 「‘運命の石’ と ‘ファラオの娘’ — 中世スコットランドに見る多民族の統合と神話の役割 —」

〔追記〕

共同研究に参加された永井教授、岡田教授、橋本教授がこの3月をもって退職されることになった。3名の先生には研究会の立ち上げにご協力いただき、また共同研究を進めるなかで多大なるご指導をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

(常見 信代)